



**Data**

監督・脚本: ラジ・リ

出演: ダミアン・ボナール/アレク  
シス・マネンティ/ジェブリ  
ル・ゾンガ/イッサ・ペリカ  
/アル=ハサン・リ/スティ  
ーヴ・ティアンチュー/アル  
マミー・カヌテ/ニザール・  
ベン・ファトマ/レーモン・  
ロベス/ジャンヌ・パリパー  
ル

## 👁️👁️ みどころ

第72回カンヌ国際映画祭にポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』(19年)が出品されていなければ? そんな「歴史上のIf」はナンセンスだが、もしそうだったら、審査員賞の受賞にとどまった本作がパルムドール賞を受賞していたはず。それほど、長編初監督作品ながら、ラジ・リ監督の本作のインパクトはすごかったらしい。

「郊外映画」というジャンル分けを私ははじめて知ったが、団地がいっぱい、移民がいっぱい、そして、貧困と差別にあえぐ郊外、モンフェルメイユの実態は? そこでの、警官の横暴ぶりは?

自由、平等、博愛の国フランスが、今でもこんな「レ・ミゼラブル」な国であることにビックリ! 『ウエスト・サイド物語』(61年)をはるかに凌ぐ「スパルタクスの反乱」と同規模(?)の少年たちの反乱は? そして、命を懸けたラストの選択は? 日本や韓国と同じ、いやそれ以上のフランスの「格差」を本作でじっくりと。さらに、ヴィクトル・ユゴーの言葉もしっかり噛みしめたい。



## ■□■カンヌで最後まで最高賞を争い審査員賞! こりゃ必見! ■□■

第92回アカデミー賞では、韓国映画がはじめて作品賞を受賞したことに全世界が驚いた。それは同時に、第72回カンヌ国際映画祭がポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』(19年)に最高賞であるパルムドール賞を授与したことへの賛意、敬意でもあった。基本的にクソ難しい作品が大好きな傾向にあるフランスのカンヌ国際映画祭と、どちらかと言うとエンタメ作品を好むアメリカのアカデミー賞は、従来違う映画が作品賞に

選ばれてきたが、第72回カンヌ国際映画祭と第92回アカデミー賞では、たまたま韓国映画『パラサイト』が最高と一致したわけだ。

そんな『パラサイト』と最後までパルムドール賞を争い、結果的に敗れたものの審査員賞に輝いたのが本作だ。別の言い方をすれば、『パラサイト』さえなければ、本作が第72回カンヌ国際映画祭のパルムドール賞に輝いていたこと確実だったということだ。しかし、私が一瞬、またあのミュージカルが映画化されたの？と思ってしまった本作は一体ナニ？

私は映画評論本『シネマルーム』をこれまでに45冊出版し、各作品ごとに画像提供をお願いしているが、その著作権をめぐる取り扱いの煩わしさにうんざりしている。そんな目で見ると、本作を監督したラジ・リ監督が本作のタイトルを『レ・ミゼラブル』とするについて、著作権者である(?) 本家本元のフランスの著名作家ヴィクトル・ユゴーの許可を取ったの？そんな疑問があるが、それはともかく、そのタイトルのインパクトの大きさと共に、ラジ・リ監督初の長編映画で第72回カンヌ国際映画祭の審査員賞を取った本作は必見！

## ■□■舞台はあの名作と同じ！その地区の昔は？そして今は？■□■

本作の舞台は、フランスのセヌ＝サン＝ドニ県の街モンフェルメイユ。そこは、ラジ・リ監督が生まれ育った街、そして、本作の主人公であるステファン（ダミアン・ボナール）が、犯罪対策班（BAC）の新人警官として配属された、治安のよろしくない街だ。とりわけ、BACの班長で、百戦錬磨のクリス（アレクシス・マネンティ）や、黒人ながらBACの警官になっているグワダ（ジェリブル・ゾンガ）が、パトロール中に行う新米のステファンへの説明を聞いていると、モンフェルメイユの中でもとりわけレ・ボスケ地区は「昔はドラッグ売買の中心地だった」らしい。そこには巨大な団地があるが、その住民にはアフリカ出身の移民が多く、若者の失業率は高いらしい。また、2005年秋には、パリ郊外からフランス全土に3週間にわたって拡大した「2005年の暴動」が発生した。これは、モンフェルメイユの隣のクリシー＝ス＝ボワで、警察に追われ変電施設に逃げ込んだ移民家庭の2人の少年が感電死した痛ましい事件をきっかけに、差別や貧困に苦しむ若者たちの不満が爆発した事件だ。

他方、このモンフェルメイユは、ヴィクトル・ユゴーの名作『レ・ミゼラブル』（1862年）における、酒場（売春宿？）を営んでいるテナルディエ夫妻が、幼いコゼットを虐待しながらこき使っていた地区だ。ジャン・バルジャンが大枚をはたいてそこで虐げられているコゼットの身柄を引き受けたことによって、その後の2人の感動的な絆が生まれたが、モンフェルメイユは、あの名作が生まれた1862年当時から問題の地区だったわけだ。

前任地が北フランスののどかな地方都市だったステファンには、このモンフェルメイユやレ・ボスケ地区はあまりにも違いが多すぎるらしい。そのため、日々のパトロールは驚

きの連続だが、具体的にステファンの目につく問題とは？そしてまた、ステファンが具体的に体験していく問題とは？

## ■□■人種、貧困差別！ウエスト・サイド物語のフランス版？■□■

私がロバート・ワイズとジェローム・ロビンス監督の『ウエスト・サイド物語』（61年）を観たのは中学3年生の頃だった。ここでは、『Tonight』をはじめとする美しい音楽と、『ロミオとジュリエット』の現代版である美しくも悲しい恋物語の展開が素晴らしかった。しかし、それと同時に、ニューヨークのウエスト・サイド地区が人種、貧困差別のつぼとなっていること、そして、その中で必然的に子供たちもシャーク団とジェット団に分かれ、無意味な対立抗争を繰り返していることを思い知らされた。

それと同じように、本作では3人一組でモンフェルメイユをパトロールするステファンの目には、貧困にあえぐ子供たちの惨状だけでなく、その背後には①最初にわたりを盗み、続いてライオンの子を盗んだ少年イッサ（イッサ・ペリカ）をはじめとする、団地に住む多くの貧しい少年たちや、その上にある②「BAC（反コカイン団）」とよばれるムスリム同胞団や、③揃いのベストを着た配下を従えている自称“市長”（スティューヴ・ティアンチュー）、の対立があることが見えてきた。また、モンフェルメイユのレ・ボスケ地区にはロマのサーカス団がいる他、バズ（アル＝ハサン・リ）のようなドローンおたく少年がいたし、ドローンで撮影したバズに文句を言う女子高生たちのグループもいた。

ラジ・リ監督は、本作導入部でそんなモンフェルメイユのレ・ボスケ地区の団地で生活している貧困層や、人種のつぼの中で勢力争いを繰り返している男たちの姿を描いている。それは、『ウエスト・サイド物語』で観た、1960年前後のニューヨークのウエスト・サイド地区と全く同じだ。もっとも、『ウエスト・サイド物語』では警官は少ししか登場しなかったが、本作の主役はモンフェルメイユに赴任してきた新人の警官ステファンをはじめとする3人のBAC（犯罪対策班）の警官たちだ。日本でも明治時代の警官は「オイ、コラ警察」と呼ばれるほど偉そうだったが、民主主義と国民の人権が尊重される今の日本の警官は低姿勢。しかし、本作に見るクリスは？

## ■□■ゴム弾を発砲！それをドローンが撮影！こりゃヤバイ！■□■

貧困の中でも子供たちはたくましく育つものだが、そこに喧嘩や盗みが伴うのは仕方ない。モンフェルメイユには、日本の住宅公団が昭和30年代にあちこちに建てた団地と同じような団地がある。そして、パンフレットの中の森千香子氏（同志社大学社会学部教授）の「フランス『郊外映画』と『レ・ミゼラブル』」で解説されているように、これは日本と同じようにフランスでも大問題らしい。とりあえず、その解説を引用すれば次のとおりだ。

舞台となるパリ郊外モンフェルメイユのレ・ボスケ団地は、1960年代にミドルクラス

向け分譲集合住宅として建設された。自然に恵まれた立地に加え、パリや空港に直結する高速道路が建設され、利便性が向上する計画だったが、高速建設が中止となって全てが一変した。パリまで徒歩とバス、電車を乗り継いで1時間半かかる「陸の孤島」の住宅は、より貧しい層に転売され、賃貸されるうちに貧困化が進んだ。1990年以降は警察と若者の衝突が相次ぎ、2005年に3週間全国で続いた暴動もこの付近で始まった。レ・ボスケは危険視される悪名高き団地となった。

阪本順治監督の『団地』（16年）（『シネマ38』255頁）と、是枝裕和監督の『海よりもまだ深く』（16年）（『シネマ38』250頁）は、「昭和な空間」＝「団地」をテーマにした面白い映画だった。その両作では、団地の貧困化とそこから生まれる社会問題は描かれていなかったが、ラジ・リ監督はモンフェルメイユのレ・ボスケ団地が貧困と差別の中で諸悪の根源になっていることを見抜き、まずはそこに住む少年の一人であるイッサがにわとりを盗むところから本作の物語をスタートさせた。毎日モンフェルメイユをパトロールしているクリスたちの努力によって、盗まれたにわとりは無事に戻されたが、次にイッサが盗んだのは子供のライオン。それはロマのサーカス団にいたものだが、いくら子供とはいえライオンはライオンだから、そんなものがサーカス団の手元を離れたら、モンフェルメイユは一体どうなるの？

他方、ライオンが盗まれたことをきっかけに、自称“市長”たち一派とムスリム同胞団たちの対立関係が少しずつ顕在化していくことに。そこで、クリスたちBACも、ライオンの子供の捜索に乗り出すとともに、複数の勢力の対立を回避するべく動き始め、今日はやっとならぬイッサを逮捕することに。ところが、逆にイッサを取り戻そうと3人の警官を追いかけてくる大勢の子供たちを威嚇する混乱の中、グワダがゴム弾をイッサに発射し、顔面にそれを受けたイッサが倒れこんでしまったから、さあ大変。ひょっとして、イッサは死んでしまったの？モンフェルメイユでの捜査のやり方を裏の裏まで知り尽くしているクリスは、この事態をいかにもみ消すかを考えていたが、上空を飛ぶドローンを見て、その一部始終が動画撮影されていたことを知ると一転して狼狽。こりゃヤバイ！ステファンはイッサの命を救うためイッサを病院に運び込むことを主張したが、クリスはそれを後回しとし、まずはドローンを操作しているオタク少年バズを見つけ出し、そのSDカードを取り上げることに全力を傾けることに。最初はそれに従っていたステファンだったが、クリスのやり方に次第に納得できなくなると・・・。

## ■□■複雑な対立構造の中、誰が何を決定できるの？■□■

三池崇史監督の最新作『初恋』（19年）は、彼の「バイオレンスは封印しました」発言とは裏腹の、久々に放ったバイオレンス作品だった。ここでは、新宿・歌舞伎町を舞台とした日本ヤクザと中国マフィアとの対立の他、悪徳警官やヤクザ組織の中でもうまく立ち回る裏切り者などを含む、複雑な勢力関係や人物たちの対立構造が興味深かった。さらに、

同作の主人公は真面目にボクシングの練習に励む若者と、ヤクザの手でヤク漬けにされた風俗嬢だったから、ストーリーはさらに複雑になっていた。

それと同じように、本作中盤、クリスらに追い詰められた、問題の SD カードを持った少年バズは、ムスリムの人々の信頼を集めているレストラン店主サラ（アルマミー・カヌテ）のもとに逃げ込み、SD カードをサラに渡したが、そこに集まってきたクリスやムスリム同胞団、さらに自称“市長”たちの、「SD カードを渡せ」との大合唱の前にサラはどう対応するの？

この場では当然 BAC のクリスが最強だが、そうは言っても、さすがにそこでは「俺が法律だ」というクリスの論理は通用しない。そこで、すべてを丸く収めようとする（？）ステファンは、サラに対して「お前の気持ちもわかる」が「とにかく SD カードを俺に渡せ」と情を訴えながら説得し、サラがそれに応じたことによって、その場は一応収まったからヤレヤレ。顔に傷を負いながら何とか家に帰れるまでに回復したイッサも、クリスから大目玉を食らう中で、泣きながら口先だけでも「ごめんなさい」と言ったから、これにて明日からのモンフェルメイユは安泰。クリスたちはそう考え、翌日からまたパトロールに出発したが、さて、クリスは問題の SD カードをどうするの？

## ■SD カードは誰に？少年たちの反乱は？■

ゴム銃を発射した黒人警官のグワダを守るため、BAC の班長であるクリスが、イッサの命よりも SD カードの回収を重視したのは、ある意味で当然。それによって、グワダのクビは守られたわけだが、それに納得できないのは、もちろんステファンだ。そしてまた、バズからサラに渡った SD カードを、とりあえず自分の手元に回収したことによって事態を丸く収めたステファンも、それで満足したわけではなかった。したがって、クリスから「SD カードをよこせ」と言われても、ステファンがそれに応じなかったのは当然だが、それは同時に、ステファンが BAC や上司のクリスを敵に回すことを意味していた。

そんなステファンは、ある日グワダと 2 人だけで会ったが、そこでステファンはグワダに対してどんな話をしたの？そしてステファンは問題の SD カードをどう処理したの？それは本作の最も本質的なシークエンスだから、あなた自身の目で確認してもらいたい。

他方、ステファンとクリスの対立を内包しつつ、3 人の BAC チームによるパトロールは続いたが、今日のパトロールでは 3 人の車を付け回している少年たちの様子がヘンだ。そう思っていると突然、少年たちが水鉄砲でパトカーを襲ってきたが、これは一体ナニ？そして、少年たちの武器は水鉄砲から本物の爆発物にエスカレートしていったから、アレレ。さらに、団地の中に逃げ込んだ少年たちを追いかけっていくと、逆に罠にかけるかのように 3 人を団地の中に誘い込んだうえ、廊下や階段から家具等を投げ込んで、本格的に攻撃してきたから、さらにアレレ。ここまで続く少年たちの反乱は、「スパルタクスの反乱」と同じように、事前に周到に計画をされたホンモノの反乱？ 3 人は本部に応援を要請したが、

応援が到着する前に、多勢に無勢、そして、土地カンの有無の差、計画性の差等々によって、今や狭いところに追い詰められた3人の命は風前の灯火に。そして今、3人の目の前には3人に投げ込む火炎瓶を手にしたイッサが仁王立ちに立っていた。ステファンは必死に「イッサやめろ！」と叫んだが、そこに見るイッサの目付きの異様さは・・・？

## ■□■ラジ・リ監督の結論は？あなたの結論は？■□■

私は来る5月に、「ヒトラーもの」と「ホロコーストもの」を特集した『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集』を出版する。また、私は『シネマルーム』を1から45まで出版するについて、「戦争もの」「恋愛もの」「潜水艦もの」「密室もの」等々の勝手な映画の「ジャンル分け」をしてきた。しかし、「郊外映画」というジャンル分けを聞いたのは、前述の森千香子氏のコラムがはじめてだ。2006年から始まった「郊外映画祭」は毎年11月にパリ首都圏で開催されているそうだが、「郊外映画」って一体ナニ？同コラムでは、「舞台が郊外団地という以外は、シリアスなものからコメディ風のもの、フィクション、ノンフィクションまで内容はさまざまだ。だが、多くの作品にみられる共通点もある。それは、郊外団地における警官の姿と住民との関係だ。」そして、「その点、『レ・ミゼラブル』は典型的な郊外映画作品だ」とされている。なるほど、なるほど。

そんな「郊外映画」の典型とされる本作のラストは、前述のようなギリギリのシーケンスになるが、さて、イッサは火炎瓶をステファンたち3人の警官に投げ込むの？ポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』では、終盤、あっと驚く全く想定外の展開になるため、監督自ら「ネタバレ厳禁宣言」をしていたが、それは本作ラストも同じだ。もともと、私はそんなクライマックスを「凍結状態」とし、その後をスクリーン上に見せないラジ・リ監督の手法は少し「ずるいな」とも思うのだが、きっと「ここまで問題提起すれば十分」「どちらの結論が妥当かは観客一人一人が決めなさい」というのがラジ・リ監督の結論なのだろう。

しかして、本作ラストには、タイトルを『レ・ミゼラブル』とした本作にふさわしく、ヴィクトル・ユゴーの小説『レ・ミゼラブル』の次の言葉が表示されるので、その意味をしっかりと噛みしめたい。すなわち、「友よ、よく覚えておけ、悪い草も悪い人間もない。育てる者が悪いだけだ」

2020（令和2）年3月25日記